

悲しみに関する慣用句の韓・日対照分析

-メタファーとメトニミーを中心に-

森本勝彦*

- 次 例 -

1. 序論
2. 先行研究
3. 理論背景
4. 悲しみを表わすメタファー
5. 悲しみを表わすメトニミー
6. 結論

* 남서울대학교 교양대학 조교수. morimoto123@nsu.ac.kr

[日文抄録]

本稿では韓国語と日本語の悲しみに関する慣用句の対照分析を試みた。心理学と認知言語学的な理論を導入し、メタファーとメトニミーを中心に考察を行なった。

韓・日両国語の悲しみを表わすメタファーの対照分析では次のような結果が得られた。両国語では容器、上・下などのイメージ・スキーマなどがメタファーの基盤となっていた。「身体は容器、悲しみは内容物」、「悲しみは下」として認識されていることが分かった。また、両国語には「悲しみは凶器」という存在のメタファーが見られた。特に、韓国語では「悲しみは凶器」、「悲しみは痣」などの表現が発達しており、日本語では「部分・全体のスキーマ」や擬人化などの例が若干見られた。

両国語の悲しみを表わすメトニミーを対照分析した結果は以下の通りであった。両国語では結果で原因を指し示す生理的メトニミーが使用されていた。悲しみに伴って発生する生理反応には、「涙の流れ、胸の痛み、咽び泣き、うつむき、目眩」などが共通して見られた。また、韓国語では「臓器の痛み」に関する表現が多彩であり、日本語では「涙の流れ」に関する表現が発達していることが分かった。これらの特徴は韓国と日本の其々の文化的な経験を反映していると考えられる。

關鍵詞: 対照分析, 慣用句, 悲しみ, メタファー, メトニミー, イメージ・スキーマ, 生理反応

1. 序論

1.1. 研究目的と範囲

本稿は韓国語と日本語の対照分析の一部である。メタファーとメトニミーを中心に、悲しみに関する慣用句の研究を行なうものである。一言語だけを考察しても、他言語との相違した特徴も共通した特徴も探し出すことは不可能だと言える。対照分析は、韓・日両国語を対照し、その異同から各言語の特徴を明らかにすることを目的としている。また、外国語教育においては学習言語と学習者の母国語との異同を基にすることによって、より効果的な教育が可能になると予想される。特に、慣用句は外国語学習者にとって習得が難しい分野でもある。韓国語または日本語教育に従事する教師のみならず学習者にも、有益な資料になるものと期待できる。

慣用句(idiom)とは、二つ以上の自立語が固定的に連結して特殊な意味を表わすものを言う¹。要素である語の語彙的な意味と構造のもつ文法的な意味から句全体の意味を推し量ることは容易でない。

(1)a. 「가슴에 멍이지다」(「胸に痣ができる」悲しみがわだかまる)

b. 「땅을 치다」(「地面を打つ」痛哭する)

(2)a. 「身を切られる」(悲しみに心が痛い)

b. 「袖を絞る」(悲しみに涙を流す)

上記のように、韓国語の慣用句(1a-b)は字義通りの意味だけでなく「悲しみがわだかまる、痛哭する」などの特殊な意味を表わし、日本語の慣用句(2a-b)も字義通りの意味の他に、「悲しみに心が痛い、悲しみに涙を流す」な

1 宮地裕, 『慣用句の意味と用法』(明治書院, 1982), p.238.

どの特殊な意味を表わしている。このような慣用的の特殊な意味は字義通りの意味から比喩を基盤として成立していると言える。

1.2. 分析方法

韓国語の慣用句の基本資料としては、朴永濬・崔炅鳳(박영준·최경봉 1996)の『慣用語辞典』(『관용어사전』)を使用することにする。この基本資料の見出し語として3, 778の慣用句が収録されている。一方、日本語の慣用句の基本資料としては、井上(1992)の『例解慣用句辞典』を使用する。この資料には約3, 700の慣用句が収録されており、慣用句の収録数では韓国語の資料とほぼ同じである²。

また、慣用句といえども、文の中で使用されるのが原則であるため、誌面の許す範囲で例文も提示することにした。韓国語の例文は国立国語院(국립국어원)の「21世紀世宗計画コーパス」(SejongCorpus)³、日本語の例文は国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)⁴から抽出した。

2. 先行研究

韓国語と日本語の慣用句に関する初期の対照分析としては、閔聖泓(민성홍 1986)と林八龍(1988)を挙げることができる。閔聖泓(1986:144-145)は「目」に関する慣用句の分析を行なった。その結果、韓国語では心理的な描

2 補助資料としては、安田他 3名(2006)の『民衆エッセンス韓日辞典』(『민중엠텐스한일사전』)、安田他 3名(2001)の『民衆エッセンス日韓辞典』(『민중엠텐스일한사전』)等を使用した。

3 국립국어원, 「21세기 세종계획 최종성과물」(SejonCorpus), (2020), DVD.

4 国立国語研究所, 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言(BCCWJ), <https://shonagon.ninjal.ac.jp> (閲覧日:2021年7月1日)

写、日本語では写実的な描写が多いということを引き出した。また、林八龍(1988:318)では、両国語の身体語彙を含む慣用句の意味と用例を分析し、頭・血・顔・目・胸・手の順に類似率が高く、肝・鼻・腹・尻・腰などは類似率が低いと結論を出している。さらに、林八龍(1999a、1999b、2000)では身体を頭部、胴体部、四肢部及び全身部とに分類して、詳細な分析を実行した。これらの論文は以後の研究の土台となっているが、分析範囲が身体部位に限定されているため多くの拡張余地も残されている。

感情表現に関する分析も多く試みられるようになった。宋殷美(2001:160)は感情表現の研究を行ない、韓国語の腹という語彙を含む慣用句では妬みや傲慢、日本語の慣用句では怒りが主に表現されると述べている。李東一(이동일2007:105)は憤怒(怒り)に関連する両国語の慣用句を対照分析し、憤怒を表わす語彙は目、頭、顔などの頭部に多いという共通点を発見した。河采伶(하채령2017:214)は、腸、肺臓、肝臓、脾胃など五臓に関連する慣用句を分析し、韓国語では怒りの表現が数多く見られるという結論を出した。続いて、コーパスを使用した研究も登場した。白以然(백이연2018:83-84)は、コーパスを用いて、「気」(기)に関連する慣用句を対照分析し、韓国語では原義に近い意味で使用され、日本語では心理を表わす意味で使用される傾向があるという結論を出した。

文法面からの対照研究も行われた。李明玉(2007:170-171)は感情表現に関する慣用句の固定性について考察した。韓国語では、名詞の省略、連体修飾化などが可能な場合が多く、構成語同士の結合が日本語より強くないという結論を出している。

認知言語学を取り入れた研究も登場した。森本(2015:95-96)などでは、頭部語彙を含む慣用句の対照分析を試み、両国語のメタファーの基盤となっている空間認識には共通点が見られるという結論を導き出してはいるが、研究範囲が身体語彙に限定されている。本稿では、認知言語学を取り入れ、身体部位に限定せず、悲しみを中心として慣用句を対照分析することにした。

3. 理論背景

3.1. 悲しみの概念

国語辞典に記述された「悲しみ」(哀しみ)の意味は次の通りである。国語辞典の記述の基本は見出し語に対する同義語(または類義語)および上位語・下位語による言い換えとなっている。以下は、『デジタル大辞泉』による悲しみの意味または同義語の説明である⁵。

(3) かなしみ 【悲しみ⁶】

悲しむこと。悲しい気持や心。悲嘆。

(4)a. かなしむ 【悲しむ】

悲しく思う。心が痛む思いだ。なげかわしく思う。

b. かなしい 【悲しい】

心が痛んで泣けてくるような気持である。嘆いても嘆ききれぬ気持だ。

c. ひたん 【悲嘆、悲歎】

かなしみなげくこと。

国語辞典のような一般的な辞書は、一般的な言語の使用者の常識に訴えて語義を説明するものである⁷。何よりも問題なのは、言葉の言い換えに終始

5 松村明監, 『デジタル大辞泉』, <https://dictionary.goo.ne.jp/jn>(閲覧日:2021年7月1日)

6 常用漢字では「かなしみ」を「哀しみ」ではなく「悲しみ」と表記することになっている。また、「愛しみ」と表記する場合にはいとおしむことや情愛などを意味する。

7 韓国語の『標準国語大辞典』(『표준국어대사전』)によると、「悲しい」(슬프다)とは悔しい経験をしたり可愛そうなものを見て心が痛くて苦しい(원통한일을 겪거나 불쌍한 일

している点である。

また、学術その他あらゆる分野に関して知識を集め記した百科事典では、悲しみを以下のように解説している。

(5)悲しみ.情動のうちで比較的基本となっている体験であり、喜びと対比される。さまざまな自己あるいは他人の不幸や失敗の経験、予期あるいは回顧などに伴う抑うつ的な情動をいう。軽度の場合には、なんとなく無力な感じという程度で、哀愁とでもいうことができる。激しい悲しみは悲痛とよばれている体験であり、泣いたり身をよじったりという身体的表出を伴うことが多い⁸。

以上のように、軽度の悲しみを無力感や哀愁、激しい悲しみを悲痛などと解説されている点は非常に興味深いと言える。

心理学者の提唱する説を参考にすることも有意義だと考えられる。代表的な基本感情説であるプルチック(Plutchik2001:349)によると、〈図1〉のように、基本感情(basicemotions)は、悲しみ(sadness)、嫌悪(disgust)、怒り(anger)、予期(anticipation)、喜び(joy)、信頼(trust)、恐れ(fear)、驚き(suprise)などの八つに分類される⁹。

을보고마음이아프고괴롭다)という意味である。一方、日本語の『デジタル大辞泉』によると、「悲しい」とは心が痛んで泣けてくるような気持ちという意味である。このように、両国語の国語辞典では、「悲しい/슬프다」には「心が痛む」という点では説明が共通している。

8 小学館編,『日本大百科全書』, <https://kotobank.jp/dictionary/nipponica/>(閲覧日:2021年7月1日)

9 同じく感情研究者であるエクマン(Ekman2003/菅訳2018:133)では、万国共通のはっきりした感情として、悲しみ、怒り、驚き、恐れ、嫌悪、軽蔑、幸せ(喜び)の七つを設定している。研究者によって若干の違いはあるが、喜び、悲しみ、怒り、恐れ、嫌悪、驚きなどが基本感情として共通して挙げられている。

〈図1〉基本感情(プルチックの感情の輪)



基本感情である悲しみは、強度によって、強い悲しみを悲嘆(grief)、弱い悲しみを悲哀・陰気(pensiveness)とに〈図2〉のように分類されている¹⁰。

〈図2〉悲しみとその強度



この説に従うと、悲嘆、悲痛、悲哀、陰気(物思い)などは悲しみの下位概念として含めることが可能になる。

さらに、基本感情は混じり合い、両者の中間的な感情である混合感情(mixedemotions)が形成される。ただし、正反対の感情とだけは混じり合うことはない。具体的には、悲しみと驚きの混じった落胆(disappointment)、悲しみと嫌悪の混じった後悔(remorse)、悲しみと恐れ of 混じった絶望(despair)、悲しみと怒りの混じった羨望(envy)、悲しみと信頼の混じった断念(resignation)、悲しみと予期の混じった悲観(pessimism)などの感情が

10 〈図2〉は、プルチック(Plutchik2001:349)、濱・鈴木・濱(2001:35)等を参考にして作成したものである。

〈図3〉のように形成されることになる¹¹。悲しみと喜びの混じった感情は形成されないことになる。

〈図3〉 悲しみの混じった混合感情

悲しみ sadness	驚き surprise	悲しみ sadness	嫌悪 disgust	悲しみ sadness	恐れ fear
落胆 disappointment		後悔 remorse		絶望 despair	
悲しみ sadness	怒り anger	悲しみ sadness	信頼 trust	悲しみ sadness	子期 anticipation
羨望 envy		断念 resignment		悲観 pessimism	

心理学を参考にした国語学分野の中村(1993:160-220)でも、感情を喜・怒・哀・楽・怖・恥・好・厭・昂・安・驚などに分類し、哀の感情として悲しみ、悲痛、悲嘆、寂しさ、孤独感、感傷、哀愁、空虚、同情、不憫などを含めている¹²。

このように、悲しみの定義に関しては、従来の国語辞典だけでは十分だとは言えない。百科事典の解説や心理学の感情説も取り入れたい。本稿では、基本感情である悲しみには、強度により悲嘆、悲痛、悲哀、陰気、哀愁、無力感などを含める。さらに、混合感情として、落胆、後悔、絶望、羨望、断念、悲観などが派生すると考える。また、他者の苦痛に共感する同

11 〈図3〉は、心理学者であるブルチック(Plutchik, R)の基本感情説を紹介した濱・鈴木・濱(2001:37)を参考にして作成したものである。基本感情が混じってさまざまな混合感情が生まれる。例えば、後悔(remorse)とは何も思い通りにできなかったという喪失感が自分の内側に向けられた嫌悪(自己嫌悪)を伴う感情だと言える。また、羨望(envy)は自分には優れた特質・財産・業績などが足りないことによる悲しみと、それらを所有し楽しんでいる他者や社会の不公平に対する怒りの感情が混合したものだと考えられる。

12 哀(あい)という漢字の訓(原義)は「かなしい、あわれむ」である。

松村明監、『デジタル大辞泉』, <https://dictionary.goo.ne.jp/jn>参照。(閲覧日:2021年7月1日)

情や不憫も悲しみに含めることにする。

3.2. 認知言語学でのメタファーとメトニミー

言語活動だけでなく思考や行動に及ぶまで、日常生活では幅広くメタファー(metaphor)が浸透している。言い換えると、我々が普段、物事を考えたり行動したりする場合、その基盤となる概念体系は根本的にメタファーから成り立っているのである¹³。メタファーとは、類似性に基づいて、ある概念を別の概念で理解するという認知のプロセスである。このプロセスにより、把握しにくい抽象的な事象を、具体的な経験を基に獲得した知識で理解していくことが可能となる。

概念体系の多くは、空間認知に関わる具体的な経験を基盤として形成されたイメージ・スキーマ(imageschema)を抽象的な概念領域へと写像(mapping)することによって構築されている¹⁴。認知図式の一つであるイメージ・スキーマの代表的なパターンは次のように提示される¹⁵。

- (6)a. 「容器のスキーマ」：我々は肉体を持った存在であり、皮膚の表面によって外界と接し、外界から区切られている。我々は自分の体を容器として経験し、また容器の中のものとして経験するので

13 Lakoff, George and Johnson, Mark, *Metaphors We Live By* (Chicago: University of Chicago Press, 1980), p.3.

14 心理学では、スキーマ(schema)とは外界を理解する枠組み、あるいは内的な知識を使用する枠組みのことである。また、概念とは物事の本質的な特徴を表わす心的表象であり、知識の基本単位のことである。道又他 5 名、『認知心理学』(有斐閣, 2003), pp.155-207 参照。

15 認知言語学ではメタファーを支える枠組み(図式)を持った知識のことをイメージ・スキーマ(imageschema)と呼んでいる。Lakoff, George, *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind* (Chicago: University of Chicago Press, 1987), p.105. 参照。

ある。

- b. 「上下、前後のスキーマ」：植物だけでなく、我々は生まれ育つ成長の過程で上を目指す。人類は進化過程で直立するようになり、前を向いていた頭は上になった。また、我々の身体を最も代表する部分である顔は前に位置している。上や前には下や後ろよりも肯定的な価値が与えられる。
- c. 「部分・全体のスキーマ」：我々は身体を部分を伴った全体として経験する。身体の規範的な形態である全体は肯定的に経験され、腕や脚などの一部を失うことは否定的に経験される¹⁶。

以上のようなイメージ・スキーマを基盤として構造化された概念領域がより抽象的な概念領域へと写像されたのが空間化メタファー (spatialization metaphor) である。このメタファーは次のように日常の言語活動に無意識のうちに浸透している。

(7)a. The ship is coming into view. (その船がだんだん視界の中に入ってきた.) (Lakoff and Johnson 1980:30)

b. 그는 나보다 한수 위다. (彼は私より一枚上である.) (임지룡 1997:157)

c. 彼らはいつも 一体になって 仕事をしている。 (山梨 1995:120)

以上の例文(7)では、容器(7a)、上・下(7b)、部分・全体(7c)などの空間的な認知構造が抽象的な概念に写像されている。

空間的な方向付けをする経験の他にも、物理的な対象に関する経験も非常に広範囲で多様な種類の存在のメタファー (ontological metaphor) の基盤となる。存在のメタファーとは、出来事や活動、感情や考えを、存在物として捉える方式である¹⁷。抽象物や無生物を人間に喩える擬人化

16 これらのイメージ・スキーマに関しては、ジョンソン (Johnson 1980:112-126)、ケヴェシュ (Kövecses 2010:339-343) 等ですでに詳しく述べられている。

17 Lakoff, George and Johnson, Mark. Op. cit, p.25.

(personification)も存在のメタファーの一種である。

- (8)a. DuPont has a lot of political power in Delaware. (デュポンはデラウェアに大量の(=大変な)政治力をもっている.)
(Lakoff and Johnson 1980:26)
- b. 市場自由競争がロシア通信市場を育てた。(鍋島 2011:157)

以上の例文(8a)では抽象物が具象化、例文(8b)では出来事が擬人化されている。具象化は抽象物に人為的な境界を設定し、具象的な存在物として理解しようとする認知のプロセスである。また、擬人化は抽象的な現象を身近な人間の活動として理解しようとするものである。

メタファーの場合と同様に、メトニミー(metonymy)は我々の言語表現はもちろん、思考や行動にまで広く浸透している¹⁸。メトニミーとは、概念間の密接な隣接性(または関連性)に基づいて、ある概念をそれと同一の概念領域内にある別の概念で指し示す認知のプロセスである。このプロセスでは、認識的な際立ちの高い部分から低い部分へと意識が向けられる。メトニミーの代表的なパターンを提示すると次の通りである。

- (9)a. ドンブリ(=ドンブリの中身)をたいらげる。(山梨 1995:30)
- b. 그는 윤동주를 좋아한다. (彼は尹東柱(の詩)が好きだ.) (임지룡 1997:198)
- c. I almost burst blood vessel. (私は殆んど血管が切れ(=怒り)そうになった.) (Lakoff 1987:382)
- d. 生徒に手を上げる。(=殴る) (辻 2008:144)

上記の例文(9)では、入れ物で中身(9a)、生産者で生産品(9b)、結果で原

18 Lakoff, George and Johnson, Mark. Op. cit, p.39.

因(9c)¹⁹、部分で全体(9d)などを指示している。また、例文(9a-b)は空間的な隣接関係、例文(9c-d)は時間的な隣接関係に基づいている。

以上のような認知言語学の理論を用いて、韓・日両国の言語に見られるメタファーとメトニミーの普遍性および個別性を探ることとする。

4. 悲しみを表わすメタファー

韓国語と日本語に見られる悲しみを表わすメタファーを考察することとする。

4.1. 空間化メタファー

4.1.1. 容器のスキーマによるメタファー

韓国語と日本語の慣用句には容器のスキーマを基に構成された概念領域がより抽象的な概念流域へと写像されているものがある。

(10)a. 「가슴이 막히다」(「胸が塞がる」心が痛い)²⁰, 「가슴이 터지다」(「胸が割れる」悲しみて心が重苦しい), 「뼈 속에 스미다」(「骨の中に沁みる」心の痛みが深く強い), 「뼈 속에 사무치다」(「骨の中に沁み通る」心の痛みが深く強い), 「뺨골에 사무치다」(「骨に染み通る」心の痛みが深く強い)

b. 한 남자와 그 남자의 돈벌이 가방과 칫솔을 빼고 나면 이 집은 빈

19 感情の原因と結果の因果関係に基づくものは生理的メトニミーと呼ばれる。レイコフ(Lakoff 1987:382)では、ある感情が及ぼす心理的影響は感情を表わすという原理が提案されている。また、林枝龍(임지룡 2006:26)でも感情が伴うとき我々の身体には様々な生理的反応が起こり、感情とその反応の間には因果関係が成立すると述べている。

20 韓国語と日本語の形式と意味が類似した慣用句には二重下線(_____)を施した。

겹데기란 말이지. 병국엄마는 가슴이 콧 막혔다.(一人の男とその男のビジネスバッグと歯ブラシを除いたら, この家は抜け殻ということだ.ピョングクの母は胸がぎっしり塞がった(=心が痛かった).)<SejongCorpus>(유시춘 외, 『여성 이야기 주머니』, 도서출판 녹두, 1992.)

- c.우리 어머니는 어느새 이렇게 늙으셨을까? 누가 이렇게 늙게했을까? '가슴이 터지는 듯합니다.(うちの母はいつの間にこんなに老けたのか.誰がこのように老けさせたのか.) 胸が割れそう(=悲しみで心が重苦しい)です.)<SejongCorpus>(구인환, 『한국현대수필을 찾아서』, 한샘출판, 1994.)

(11)a.「胸が塞がる」(悲しみで胸がいっぱいになる), 「胸がつかえる」(悲しみで胸が苦しい), 「胸が一杯になる」(悲しみでものものも言えない)²¹, 「胸に余る」(悲しみに耐えられない)

- b.夕飯のあと片づけをしながら、急にみじめな思いに胸がふさがり(=悲しみで胸がいっぱいになり)、つい手がすべって大事な皿を割ったりする。<BCCWJ>(沢村貞子, 『私の台所』, 暮らしの手帖社, 1981.)

- c.何という可哀相な子だろう。私はそう思って胸が一杯になりました(=悲しみでものものも言えなくなりました)。<BCCWJ>(齊賀琴, 『青鞥』, 『女性解放論集』, 岩波書店, 1991.)

以上のように、両国語の慣用句(10-11)は「身体は容器、悲しみは内容物」というメタファーに基づいて成立している。韓国語(10)では「胸や骨は容器、悲しみは内容物」、日本語(11)では「胸は容器、悲しみは内容物」と認識されていることが分かる。両国語には「胸が塞がる/胸がつかえる」(가슴이 막히다)という類似した表現も見られ、韓国語では「ぎっし리(꽂)、ぐっと

21 「胸が一杯になる」は悲しみだけでなく感激を受けたときにも用いられる慣用句ではあるが、今回の研究では悲しみに焦点を当てて分析した。

(탁)」などの副詞を伴うことも多い。また、韓国語では「骨の中に沁み通る」(뼈속에사무치다)のように、胸だけでなく骨までも容器と見なされていると言える。

4.1.2. 上・下のスキーマによるメタファー

韓国語と日本語の慣用句には上・下のスキーマを基に構成された概念領域がより抽象的な概念流域へ写像されているものがある。

(12)a. 「가슴이 무너지다」(「胸が崩れる」衝撃で心が痛い), 「가슴이 무너져 내리다」(「胸が崩れ落ちる」衝撃で心が痛い), 「가슴이 내려앉다」(「胸が落ちる」衝撃で心が痛い), 「억장이무너지다」(「億丈(の城)が崩れる」悲しみで絶望する)²²

b. 도시계획에 들어 있다는 것은 미리 들어서 알고 있었지만 이렇게 두길 이 가로세로 얽히면서 집 한 채가 잡아 먹힌 것을 보니 가슴이 무너지는 듯하였다.(都市計画に含まれていることは、事前に聞いて知っていたが、このように二つの道が縦横に絡まって家一軒が無くなったのを見ると、胸が崩れる(=衝撃で心が痛む)ようであった。)<Sejong Corpus>(이호철, 『이단자』, 창작과비평사, 1976.)

c. 지난해 겨울 딸의 방을 휘감고 타오르는 불길을 속수무책으로 지켜보던 기억에 정 씨는 하루에도 수십 번 억장이무너진다.(昨年の冬、娘の部屋を取り囲んで燃え上がる炎を途方に暮れて見守っていた記憶でチョン氏は、一日に数十回、億丈が崩れる(=悲しみで絶望する。)<SejongCorpus>(도정일 외, 『녹색평론』48호, 녹색평론사, 1999.)

(13)a. 「氣を落とす」(がっかりする), 「力を落とす」(失望する), 「声涙

22 『ウリマル雑学辞典』(우리말잡학사전)によると、億丈(억장)とは億丈之城(억장지성)の略語であり、高さが億丈ぐらいに積まれた高い城のことを言う。

ともに下る」(悲しみに涙を流す), 「涙に沈む」(悲しみにうちしおれる)

b. 親父どのが死んだそうなの。いずれは別れねばならぬ定めじゃ。気を落とすな(=がっかりするな)。<BCCWJ>(戸部新十郎, 『前田利家』上, 光文社, 2001.)

c. 十六歳で高校生の従妹が甲平に、力を落とすな(=失望するな)と励ました。<BCCWJ>(清水一行, 『一瞬の寵児』, 光文社, 2001.)

以上のように、両国語の慣用句(12-13)は「悲しみは下」というメタファーに基づいて成立している。韓国語(12)の「崩れる(무너지다)、落ちる(내려앉다)」、日本語(13)の「落とす、下る、沈む」などの語は空間的に下を意味している。我々は悲しかったり失望したりした時にはうつむいた姿勢になるものであり、上・下のメタファーはこのような日常経験に起因していると考えられる²³。

4.1.3. 部分・全体のスキーマによるメタファー

日本語の慣用句には部分・全体のスキーマを基に構成された概念領域がより抽象的な概念流域へ写像されているものがある。

(14)a. 「片腕をもがれたよう」(補佐役の人物を失った悲しみの様子)

b. その頭家を失って、後醍醐は片腕を挽がれたような(=補佐役の人物を失った悲しい)気がした。<BCCWJ>(森村誠一, 『大平記』6, 角川書店, 2005.)

23 慣用句以外にも、韓国語では「落胆」(낙담)、 「落心」(낙심)、 「落望」(낙망)、 「沈鬱」(침울)、日本語では「落胆」、「沈鬱」、「落ち込む」などの語に「悲しみは下」というメタファーが見られる。

以上のように、日本語(14)には、五体満足な身体ではなく欠損した身体には悲しみとして認識されている。つまり全体ではなく、欠如した部分には悲しみというマイナス的な(好ましくない)意味が付与されている。また、「補佐役は片腕」という語彙的なメタファーも見られる。韓国語の基本資料からは部分・全体のメタファーは見当たらなかった。

4.2. 存在のメタファー

4.2.1. 事物化

韓国語と日本語の慣用句には抽象物が具体的な物質として認識されたメタファーが見られる。

(15)a. 「가슴이 찢어지다」(「胸が裂ける」心が痛い), 「가슴을 도려내다」(「胸を抉り出す」心を痛める), 「가슴을 저미게 하다」(「胸を薄く切る」心を痛める), 「가슴을 저미다」(「胸を薄く切る」心を痛める), 「가슴을 찌르다」(「胸を刺す」心を痛める), 「창자를 도려내다」(「腸を抉る」心を痛める), 「뼈를 긁어내다」(「骨を搔き出す」心の痛みがひどい)

b. 독재정권 타도하여 부모님께 효도하자는 구호도 있잖아. 나도 시골에 계신 부모님을 생각하면 가슴이 찢어질 듯해. (独裁政権を打倒して両親に親孝行しようというスローガンもあるじゃないか. 私も田舎にいる両親を思うと, 胸が裂けそうだ(=悲しい).)<SejongCorpus>(김하기, 『완전한 만남』, 창작과비평사, 1990.)

c. 남편이나 아이가 죽는다 상상만해도 눈물이 앞을 가리는 한집순에게는 가슴을 도려내는 듯한 말이었지만 그는 진정 자기의 죽음을 남편의 일처럼 건성으로 대하는 것이었다.(夫や子が死ぬと想像しただけでも涙が前を遮るハン・チョムスンには胸を抉り出す(=心を痛め

る)ような話であったが、彼女は本当に自分の死を他人事のように上の空で聞くのであった。)〈SejongCorpus〉(안재성, 『어느화가의승천』, 새길, 1992.)

- (16)a. 「胸が張り裂ける」(悲しみで苦しい思いをする), 「身を切られる」(悲しみで心が痛い)
 b. いっぱしに恋をし、胸が張り裂ける(=悲しみで苦しい思いをする)のような失恋まで体験したとは到底思えない。〈BCCWJ〉(高山路爛, 『わが愛はやまず』, 文芸社, 2002.)
 c. 幼稚園の年長組にいて、来春の小学校入学を楽しみにしている次男と遠く離れての入院生活は、身を切られる(=悲しみで心が痛い)思いがいたしました。〈BCCWJ〉(藤野武彦, 『BOOCSダイエット』, 朝日新聞社, 2005.)

以上のように、両国語の慣用句(15-16)は「悲しみは凶器」というメタファーに基づいて成立している。韓国語(15)の「刺す(찌르다)、裂ける(찢어지다)、抉り出す(도려내다)、薄く切る(저미다)、日本語(16)の「張り裂ける、切られる」などの語は凶器による作用を認識させるところがある。特に、韓国語ではこのようなメタファーが発達していると言える。また、両国語の類似表現としては「胸が張り裂ける」(가슴이 찢어지다)が使われていることも分かる。

- (17)a. 「가슴에 멍이 들다」(「胸に痣ができる」悲しみがわだかまる)²⁴, 「가슴에 멍이 지다」(「胸に痣ができる」悲しみがわだかまる), 「가슴에 피멍이 들다」(「胸に青痣ができる」悲しみがわだかまる), 「멍이 들다」(「痣ができる」心を痛める), 「멍이지다」(「痣ができる」心を痛める), 「가슴에 멧히다」(「胸に凝る」悲しみがわだかまる),

24 韓国語の「胸に痣ができる」(「가슴에 멍이 들다」)などは悲しみだけでなく恨みが心にわだかまる場合にも用いられるが、ここでは悲しみを中心に分析した。

「풀이 죽다」(「糊気がなくなる」しょげる), 「풀이 꺾이다」(「糊気が削がれる」しょげる), 「심금을 울리다」(「心琴を鳴らす」悲しみが高揚する)²⁵

b. …지난밤, 새로산 크레파스를 꺼내어 동생하고 만져보고 하더니 빼놓고 간 모양이었다. 첫날부터 어린것의 가슴에 멍이 들다니….(昨夜, 新しく買ったクレヨンを取り出して弟と触っていたが, 置き忘れて行ったようだ. 初日から幼い子の胸に痣ができる(=胸に悲しみがわだかまる)なんて…)<SejongCorpus>(우리교육출판부, 『우리교육 초등용』, 1월호, 우리교육, 1995.)

c. 패자는 풀이 죽게 마련인데 오히려 이전보다 더 큰소리를 친다.(敗者は糊気がなくなる(=落胆する)ものだが, むしろ以前よりも偉そうなことを言う.)<SejongCorpus>(최병권, 『세계시민입문』, 박영물출판사, 1994.)

(18)a. 「青菜に塩」(しょげかえる)²⁶

b. いま長正にこっばみじんに打ちすえられた柞木清三郎以下七名の小笠原藩の選手たちが、試合後の青菜に塩の(=しょげかえった)表情とは別人のような勝ち誇った顔をして、長正たちに追いついて来た。<BCCWJ>(森村誠一, 『西郷斬首剣』, 中央公論新社, 2004.)

以上のように、韓国語(17)では「悲しみは痣」、「落胆は糊気のなさ」、日

25 韓国語の「심금을 울리다」(心琴を鳴らす)は悲しみだけでなく喜びが高揚した場合にも用いられるが、ここでは悲しみに焦点を当てて分析対象に含めた。この慣用句は「心は琴の糸」というメタファーに基づいていると考えられる。日本語にも「琴線に触れる」という慣用句があるが、これは悲しみではなく喜ばしい感動を受けた場合にのみ用いられる。

26 『故事・俗信ことわざ大辞典』には、故事やことわざだけでなく慣用句も一部収録されている。「青菜に塩」以外にも「青菜に湯」、「青菜を湯に漬けたよう」などの類似した表現が見られる。

本語(18)では「落胆は青菜の萎れ」といったメタファーが見られる。これらは具体的な事物で抽象的な心理状態を表わしていると言える。特に韓国語には「悲しみは痣」という表現が発達していることも分かる。韓国語の「痣、糊気」、日本語の「青菜」などの語には各国の衣服、健康、食物など身近で日常的な生活文化での経験が反映していると考えられる。

4.2.2. 擬人法(活喩法)

日本語の慣用句には抽象物が人間または動物として認識されているものがある。

(19)a.「涙を誘う」(相手に同情して涙が溢れそうになる), 「涙を催す」
(涙が流れそうな気持になる)

b.『淳』(文藝春秋)は、愛息をこんな形で突然に奪われた両親の悲嘆が素直に吐露されて涙を誘いますが(=同情で涙が溢れそうになります)、これを読めば、少年Aの親には良識が欠如していたであろうことが窺えます。<BCCWJ>(佐々木知子, 『少年法は誰の味方か』, 角川書店, 2000.)

以上のように、日本語(19)では、「誘う、催す」などの語が使われており、涙が擬人化されていることが分かる。このような慣用句においては、悲しみという抽象的な感情を人間の活動という観点からより容易に理解することが可能になる。韓国語の基本資料からは擬人化の例は見当たらなかった。

5. 悲しみを表わすメトニミー

韓国語と日本語の悲しみを表わすメトニミーは生理反応によるものであ

る。外面的な生理反応と内面的な生理反応によるものに分けて分析することにする。

5.1. 外面的な生理反応によるメトニミー

韓国語と日本語の慣用句には、他人からも観察できる生理反応から悲しみを指し示すメトニミーが見られる。

(20)a. 「눈물이 핑돌다」(「涙がじんと滲む」悲しい), 「눈물이 앞을 가리다」(「涙が前を遮る」悲しい)

b. 생님께서 우리반에서 정은이가 일등이라고 말씀하셨다. 나는 아무도 모르게 눈물이 핑돌았다. (先生は私たちのクラスの中でジョンウンが一番だとおっしゃった. 私は人知れず涙がじんと滲んだ(=悲しかった).) <SejongCorpus>(이오덕, 『웃음이 터지는 교실』, 창작과비평사, 1991.)

(21)a. 「涙を禁じえない」(同情して涙を流す), 「涙に咽ぶ」(涙に声をつまらせて泣く), 「泣きべそをかく」(泣きそうな顔をする), 「目頭を押さえる」(泣きたいのを我慢する), 「袖を絞る」(悲しみに涙を流す), 「袂を絞る」(悲しんで泣く), 「涙に暮れる」(悲しんで泣いて暮す), 「血の涙」(耐えがたい悲しみ), 「血涙を絞る」(悲しみのあまり激しく泣く), 「紅涙を絞る」(若い女性が悲しい場面に接して涙を流す),

b. しかし、あらためて兄、弟がともに戦死した家庭に思いを馳せる時、涙を禁じ得ない(=同情して涙を流してしまう)のは筆者だけではあるまい。<BCCWJ>(吉野泰貴, 『流星戦記』, 大日本絵画, 2005.)

c. 母はそれを見て、「ああいやだねえ。おじいちゃんがあんなところに入るなんて」と 目頭を押さえた(=泣きたいのを我慢した)。

<BCCWJ>(加賀乙彦, 『夕映えの人』, 小学館, 2002.)

以上の両国語の慣用句(20-21)のように、悲しみの生理反応として、韓国語では「涙がじんと滲む」(눈물이 핑돌다)、「涙が前を遮る」(눈물이 앞을 가리다)、日本語では「涙を禁じえない」、「目頭を押さえる」、「涙に咽ぶ」など、涙に関連した生理反応が共通して確認される。特に、日本語では涙に関連した生理反応によるものが多いことが分かる。また、日本語の「血の涙、血涙、紅涙」などは泣いて目が充血していることに関連した語彙的なメトニミーだと言える。

- (22)a. 「고개를 떨구다」(「首を垂れる」落胆する), 「어깨를 들먹이다」(「肩を上下に揺り動かす」咽び泣く), 「목을 놓다」(「喉を解く/声をあげる」悲しんで泣く), 「가슴을 치다」(「胸を打つ」無念だ), 「땅을 치다」(「地面を打つ」痛哭する)
- b. 은정이는 고개를 떨구고 있었다. 자세히 보니 뺨에 눈물이 흘러 내리고 있었다. (ウンジョンは首を垂れて(=落胆して)いた。よく見ると頬に涙が流れ落ちていた。) <SejongCorpus>(교육부편, 『말하기·듣기·쓰기』5-2, 국정교과서주식회사, 1997.)
- c. 이게 어떻게 된 일이야! 그녀는 내 말에 대꾸도 하지 않고 이 내 어깨를 들먹였다. (それはどうしたんだ! 彼女は私の言葉に返事もしないで, ずっと肩を上下に揺り動かした. (=咽び泣いた)) <SejongCorpus>(유홍중, 『슬픈시인의 바다』, 도서출판 장락, 1994.)

- (23)a. 「肩を落とす」(失望したり気力を失う), 「声が潤む」(悲しみで涙声になる), 「腑の抜けたよう」(気力がない様子)²⁷, 「生彩がない」

27 腑とは五臓六腑の六腑のことであり、六腑とは大腸、小腸、胆、胃、三焦、膀胱のことである。これだけのものが人体から抜けてなくなると、元気がなくなるのは当然だと言える。

(元気よさが見られない)

b. 公開飛行での失敗はショックには違いなかったが、肩を落とす(=失望する)よりも、原因の追及のほうが先だった。〈BCCWJ〉(伴田薫/山本出, 『成功へ退路なき決断』, 日本放送出版協会, 2004.)

c. 「一緒に遊ぶ子がいたわ。あたし、その子が好きだった」あたしは思わずのようがいい、声が潤んで(=悲しみで涙声になって)いるのに気がついて、喉がつまった。〈BCCWJ〉(氷室冴子, 『なんて素敵にジャパネスク』8巻, 集英社, 1991.)

以上の慣用句(22-23)のように、韓国語では「首を垂れる」(고개를 떨구다)、日本語では「肩を落とす」など、うつむきに関する生理反応がメトニミーに共通して適用されている。また、韓国語では「肩を上下に揺り動かす」(「어깨를 들먹이다」)、「声をあげる」(목을 놓다)、日本語では「声が潤む」など、泣くことに関連した生理反応も見られる。韓国語の「胸を打つ」(가슴을 치다)、「地面を打つ」(땅을 치다)などは後悔や痛哭に伴う反応の一種であり²⁸、日本語の「腑の抜けたよう」、「生彩がない」なども落胆に伴う生理反応だと言える。

5.2. 内部的な生理反応によるメトニミー

韓国語と日本語の慣用句には、身体の内部的な生理反応から悲しみを指し示すメトニミーが見られる。

塩田丸男, 『人体表現読本』(白水社, 1988), p.216.

28 厳密には、韓国語の「胸を打つ」(가슴을 치다)、「地面を打つ」(땅을 치다)などは身体的反応と言った方が適当かも知れないが、本稿では外部の刺激に対する生体の反応である生理反応の一種として扱った。

(24)a. 「가슴이 아프다」(「胸が痛い」悲しい), 「가슴을 앓다」(「胸を病む」一人で心を痛める), 「가슴이 쓰리다」(「胸がひりひり痛む」心が痛い), 「가슴이 저리다」(「胸が痺れる」心が痛い), 「창자가 끊어지다」(「腸がちぎれる」悲しみで我慢できない), 「간장을 끓다」(「肝臓がちぎる」とても悲しく不慣である), 「가슴이 미어지다」(「胸が裂ける」悲しみで心が痛い), 「뼈 아프다」(「骨が痛い」後悔して苦しい)

b. 나는 여배우를 자꾸 벗어나는 영화를 보면, 우리 여자들의 가혹한 현실을 그대로 보는 듯해서 가슴이 아프다. (私は女優をしきりに脱がせる映画を見ると, 我々女性の苛酷な現実をそのまま見るように胸が痛い(=悲しい).) <SejongCorpus>(하은경, 『그러나 매춘은 없다』, 새길, 1994.)

c. 그가 아픈 다리를 조심스럽게 옮겨 딛으면서 얼굴을 찡그릴 때마다 채란은 그를 위해 아무것도 거들어 줄 수 없는 자신이 안타까워 가슴이 저렸다. (彼が痛めた足を慎重に運び踏み出しながら顔をしかめるたびにチェ란은彼のために何も手伝ってあげられない自分がもどかしくて 胸が痺れた(=心が痛かった).) <SejongCorpus>(정종명, 『숨은 사랑』, 동아출판사, 1993.)

(25)a. 「胸が痛む」(悲しみで辛い), 「胸を痛める」(悲しみで辛い), 「斷腸の思い」(悲しい気持ち), 「骨身に應える」(悲しみなどを強く感じる)

b. 娘が会社の一翼を担う日が来るとは知らずにこの世を去った父のことを考えると、胸が痛んだ(=悲しみで辛かった)。 <BCCWJ>(ドナ・クレイトン(著)/宮崎真紀(訳), 『誘惑は禁止!』, ハーレクイン, 2001.)

c. 神は、罪におぼれる人々を、斷腸の思い(=悲しい気持ち)で見られるのです。 <BCCWJ>(久保有政, 『キリスト教入門』, レムナント出版, 2003.)

以上のように、両国語の慣用句(24-25)では、悲しみの生理反応として、「胸が痛む」(가슴이 아프다)、「胸を痛める」(가슴을 앓다)、「断腸の思い」(창자가 끊어지다)などが共通して確認される。このうち、「断腸の思い」は子を失い悲しみのあまり死んだ母猿の腸が細かく千切れていたという『世説新語』に収録された故事に由来すると考えられる²⁹。全体的に、両国語では悲しみには身体の苦痛を伴う生理反応がメトニミーとして使用されていることが分かる。特に、胸の痛みに関するものが大部分を占めていると言える。韓国語では臓器に痛みを伴う表現が多彩であることが特徴的でもある。

- (26)a. 「눈앞이 캄캄하다」(「目の前が真っ暗だ」絶望的だ), 「앞이 캄캄하다」(「前が真っ暗だ」絶望的だ), 「눈앞이 아찔하다」(「目の前がくらくらとする」絶望的だ), 「목이 막히다」(「喉が詰まる」悲しみが込み上げる), 「맥이 빠지다」(「氣力が抜ける」がっかりする)
- b. 연봉 1억5000만 원이 사라지니 눈앞이 캄캄해지더군요. 월급없이 산다는 것을 결단하기란 정말 힘이 들었습니다.(年俸1億5000万ウォンが消えるので、目の前が真っ暗になりました(=絶望的でした)。月給なしで生きることを決断するのは、本当に大変でした。) <SejongCorpus>(조선일보사, 『주간조선』 1742호, 2003.)
- c. 사실 면접 대화에 몇 번 실패하고 나면 맥이 빠지고 두 번 다시 면접에 응할 기분이 나지 않는다.(實際, 面接でのインタビューに数回失敗すると、氣力が抜けて(=がっかりして)二度と面接に応じる気はしない。) <SejongCorpus>(김양호, 『화술과 인간관계』, 영언문화사, 2001.)

- (27)a. 「目の前が暗くなる」(落胆する), 「目頭が熱くなる」(心に感じて

29 『世説新語』は中国の逸話集である。六朝時代の南朝宋の劉義慶が編纂したもので、竹林の七賢など、後漢末から宋初までの貴族・文人・僧侶などの逸話が集められている。松村明監, 『デジタル大辞泉』, <https://dictionary.goo.ne.jp/jn/>(閲覧日:2021年7月1日)

涙が出そうになる)、「涙を覚える」(涙が出そうになる)、「不覚の涙」(悲しみで思わず流す涙)、「見るに忍びない」(気の毒で見るのがつらい)

b.別れるって、いったの…!?世界がこっぴみじん。目の前が暗くなった(=落胆した)。<BCCWJ>(青山えりか、『好きから始まる冬物語』, 講談社, 1992.)

c.あの北国の雪と結核療養所で死んだ波郷に思いをいたして、私も思わず目頭が熱くなって(=涙が出そうになって)しまった。<BCCWJ>(宮脇俊三、『乗る旅・読む旅』, JTB, 2001.)

以上のように、両国語の慣用句(26-27)では絶望した場合に「目の前が暗くなる」(눈앞이 캄캄하다)という目眩の反応が共通して見られる。また、韓国語では「喉が詰まる」(목이막히다)、「気力が抜ける」(맥이빠지다)などの悲しみに伴う多様な生理反応が見られ、日本語では「目頭が熱くなる」、「涙を覚える」、「不覚の涙」など涙に関する生理反応が数多く見られる。

6. 結論

本稿は韓国語と日本語の対照研究の一環であり、悲しみに関する慣用句の対照分析を試みた。研究の目的は、両国語を対照し、その異同から各言語の特徴を明確にすることにある。理論としては感情心理学と認知言語学を導入し、分析方法としては慣用句辞典や「コーパス」などを用いた。以下の通り、メタファーとメトニミーを中心に考察を行なった。

まず、韓・日両国語の悲しみを表わすメタファーの対照分析では次のような結果が得られた。両国語では容器、上・下などのイメージ・スキーマなどがメタファーの基盤となっていた。「身体は容器、悲しみは内容物」、「悲しみは下」として認識されていることが分かった。また、両国語には「悲し

みは凶器」という存在のメタファーが共通して見られた。特に、韓国語では「悲しみは凶器」が発達していることが分かった。さらに、韓国語では「悲しみは痣」、「落胆は糊気のなさ」などのメタファーが見られ、日本語では「落胆は青菜の萎れ」というメタファーが見られた。日本語には「部分・全体のスキーマ」や擬人化などの例が若干見られるのも特徴であった。

次に、両国語の悲しみを表わすメトニミーを対照分析した結果は以下の通りであった。両国語では結果で原因を指し示す生理的メトニミーが使用されていた。両国語において、悲しみに伴って発生する生理反応には、「涙の流れ、胸の痛み、咽び泣き、うつむき、目眩」などが共通して見られた。これらの生理反応から悲しみを示すメトニミーが形成されていた。また、韓国語では「臓器の痛み」に因る多彩な生理反応によるものが見られ、日本語では「涙の流れ」に因るものが豊富であることが分かった。

総括として、韓国語と日本語の間では、「身体は容器、悲しみは内容物」、「悲しみは下」、「悲しみは凶器」などのメタファー、「涙の流れ、胸の痛み、咽び泣き、うつむき、目眩」などの生理反応によるメトニミーは普遍性の高いものとなっている。一方、韓国語では「悲しみは痣」、「落胆は糊気のなさ」などのメタファー、「臓器の痛み」による多彩なメトニミーが見られ、日本語では「落胆は青菜の萎れ」や擬人化のメタファー、「涙の流れ」に関する多彩なメトニミーが見られるが、これらは各言語の個性を表わしている。これらの普遍性と個性は韓国と日本の其々の文化的な経験の反映であると考えられる。今後、悲しみだけでなく、さらに多くの感情について研究を進めることも必要である。

[ABSTRACT]

A Contrastive Study of Idioms about Sadness in Korean and Japanese : Focus on Metaphor and Metonymy

Morimoto, Katsuhiko(NamSeoul University)

This paper is a contrastive analysis of idioms about sadness in Korean and Japanese. Introducing psychological and cognitive linguistic theories, we attempted to analyze mainly metaphor and metonymy.

We analyzed the metaphor that expresses sadness and obtained the following results. In both languages, image schemas such as containers and top-down were the basis of the metaphor. It turned out that "the body is the container, sadness is the contents", and "sadness is down". In addition, there was a ontological metaphor of "sadness is a weapon" in both languages. Especially in Korean, the expressions "sadness is a weapon" and "sadness is a bruise" have been developed. In Japanese, there were some examples of part-whole schema and personification.

The following results were derived by analyzing the metonymy that expresses sadness. In both languages, physiological metonymy was used to indicate the cause from the result. Physiological reactions caused by sadness included "flow of tears, chest pain, sobbing, depression, and dizziness."

In particular, it was found that there are many expressions related to "organ pain" in Korean and many expressions related to "tears" in Japanese.

These characteristics are thought to reflect the cultural experiences of Korea and Japan.

Key words: Contrastive Study, Idioms, Sadness, Metaphor, Metonymy, Image Schemas, Physiological Reactions

[參考文獻]

■ 辭書、コーパス類

국립국어원, 『표준국어대사전』, <https://stdict.korean.go.kr/main/main.do>(閱覽日:2021年7月1日)

국립국어원, 「21세기 세종계획 최종성과물」(SejongCorpus), DVD, 2020.

박영준·최경봉 편, 『관용어 사전』, 태학사, 1996.

安田吉実他 3名編著, 『民衆эт센스韓日辞典』, 전면개정판, 민중서림, 2006.

安田吉実他 3名編著, 『民衆эт센스日韓辞典』, 제2개정판, 민중서림, 2001.

이재윤·박숙희 편, 『우리말 잡학사전』, 노마드, 2018.

国立国語研究所, 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言(BCCWJ), <https://shonagon.ninjal.ac.jp>(閱覽日:2021年7月1日)

小学館編, 『日本大百科全書』, <https://kotobank.jp/dictionary/nipponica/>(閱覽日:2021年7月1日)

松村明監, 『デジタル大辞泉』, <https://dictionary.goo.ne.jp/jn>(閱覽日:2021年7月1日)

井上宗雄監, 『例解慣用句辞典』, 創拓出版社, 1992.

中村明編, 『感情表現辞典』, 東京堂出版, 1996.

■ 単行本

임지룡, 『말하는몸:감정표현의인지언어학적탐색』, 한국문화사, 2006, 26면.

임지룡, 『인지 의미론』, 탑출판사, 1997, 157-198면.

鍋島弘治郎, 『日本語のメタファー』, くろしお出版, 2011, p.157.

宮地裕, 『慣用句の意味と用法』, 明治書院, 1982, p.238.

道又爾他 5名, 『認知心理学: 知のアーキテクチャを探る』, 有斐閣, 2003, pp.155-203.

濱治世·鈴木直人·濱保久, 『感情心理学への招待: 感情・情緒へのアプローチ』,

サイエンス社, 2001, pp.35-37.

山梨正明, 『認知文法論』, ひつじ書房, 1995, pp.30-120.

辻幸夫, 『認知言語学への招待』, 大修館書店, 2003, p.144.

塩田丸男, 『人体表現読本』, 白水社, 1988, p.216.

Ekman, Paul, Emotionsrevealed:Recognizingfacesandfeelingstoimprovecommunicationandemotionallife. NewYork:HenryHoltandCompany, 2003. (菅靖彦訳, 『顔は口ほどに嘘をつく』, 河出文庫, 2018, p.133.)

Johnson, Mark, TheBodyintheMind. Chicago:UniversityofChicagoPress, 1987, p.382.

Kövecses, Zoltán, Language, Mind, andCulture:APracticalIntroduction. Oxford:OxfordUniversityPress, 2006, (임지룡·김동환역, 『언어, 마음, 문화의인지언어학적탐색』, 역락, 2010, pp.339-343.)

Lakoff, George, Women, Fire, andDangerousThings:WhatCategoriesReveaabouttheMind. Chicago:UniversityofChicagoPress, 1987, pp.105-382.

Lakoff, GeorgeandJohnson, Mark, MetaphorsWeLiveBy. Chicago:UniversityofChicagoPress, 1980, pp.3-39.

■ 論文

민성홍, 「현대 한·일어의 ‘눈(目·眼)’에 관한 비유 표현 어구의 비교 연구」, 『서정범 박사 화갑기념 논문집』, 집문당, 1986, 113-146면.

백이연, 「‘기/氣’ 관련 관용구의 한일 대조연구」, 『일어일문학연구』 106집 1권, 한국일어일문학회, 2018, 83-99면.

森本勝彦, 「韓国語と日本語の頭部語彙を含む慣用句に関する対照研究」, 『일본문화연구』 55집, 동아시아일본학회, 2015, 77-98면.

宋殷美, 「日·韓兩言語の慣用句に現れる感情表現:身体語彙を中心として」, 『일본어학연구』 4집, 한국일본어학회, 2001, 143-163면.

이동일, 「韓·日兩言語의 憤怒에 대한 慣用的表現研究」, 『일본언어문화』 11집, 한

- 국일본언어문화학회, 2007, 83-106면.
- 李明玉, 「日・韓感情表現慣用句の安定性について」, 『일본어문학』37집, 일본어문학회, 2007, 157-172면.
- 林八龍, 「日・韓身体語彙慣用句の対照考察Ⅲ:四肢部と全身部を中心として」, 『한국외국어대학교논문집』 32집, 한국외국어대학교, 2000, 169-185면.
- 林八龍, 「日・韓身体語彙慣用句の対照考察Ⅱ:胴体部を中心として」, 『한국외국어대학교 논문집』 31집, 한국외국어대학교, 1999b, 131-143면.
- 林八龍, 「日・韓身体語彙慣用句の対照考察Ⅰ:頭部を中心として」, 『일본연구』13권, 한국외국어대학교 일본연구소, 1999a, 279-306면.
- 林八龍, 「日・韓身体語彙慣用句の比較対照のための基礎研究」, 『한국외국어대학교논문집』 21집, 한국외국어대학교, 1988, 271-319면.
- 하채령, 「신체어휘 오장에서 나타나는 감정표현 관용구에 관한 고찰」, 『일어일문학연구』 101집 1권, 한국일어일문학회, 2017, 213-232면.
- Plutchik, Robert. "TheNatureofEmotions," AmericanScientist, Vol.89, No.4, North Carolina: SigmaXi, 2001, pp.344-350.